

生物資源管理学科の一年

川地武

生物資源管理学科長

行事関係

- 02 月 卒業研究発表会
- 03 月 学位授与式(卒業式)
- 03 月 泉助教授が日本作物学会論文賞を受賞
- 04 月 入学式、新任教員 2 名が着任
- 07 月 オープンキャンパス(参加者 38 名)
- 08 月 高大連携講座(参加者 15 名)
- 09 月 須戸講師が日本陸水学会 2006 年度学会賞(吉村賞)を受賞
- 11 月 高校への出前講義(守山高校、大垣南高校)
- 12 月 研究成果発表会(滋賀県農林水産技術会議と共催)

学生の動向

3 月には卒業生 64 名を送り出し、4 月に新入生 61 名を迎える。17 年度入学者に 2 名の退学者が出たが、理由は他大学受験の意向であった。平成 18 年 12 月現在の休学者はゼロであり、入学後の迷いや頓挫はないようで、ありがたいことである。なお、現在 2 名の留年者がいるが、若干の単位不足や進路変更によるものであり、卒業に向けたさらなる支援が必要である。(その結果、19 年 3 月に卒業の運びとなった。)

18 年 3 月卒業生の就職状況であるが、就職希望者 43 名、卒業時の内定者 39 名(内定率 90.7%)であり、世間でいわれる就職戦線の好転がまだ反映されていない。19 年 3 月卒業予定学生の内定率はこれより好転しており、卒業時には 100%となることを期待している。

学科運営

4 月から当大学は公立大学法人となり、大学の運営、意思決定方式が変わりました。しかし、学科レベルでは変化を感じる局面は少なく、法人化の中身はこれから作って行くのかも知れません。

学科のあり方、理念についてあいまいさを残す状態が続きます。環境か、環境農学か、生物機能の活用かとゆれ、これが学生の履修科目の多さと、卒業研究や進

路選択の迷いにもつながります。今年は 19 年度からのカリキュラムの見直しを行いました。金木教授をリーダーとして学科カリキュラム委員会を立ち上げ、この委員会から 3 つの履修コースが提案されました。その 3 つとは①生物生産、②生物機能利用、③地域環境管理です。19 年度から入学する学生はこのいずれに進むかを意識しつつ履修科目を選択することになります。理念問題がこのような具体的な課題を通じて徐々に明確になり、着地することを期待したい。

長年の懸案であった環境計画学科の 2 専攻の独立問題に解決のメドが立ち、環境建築デザイン学科と環境政策計画学科としてスタートする。これに伴い、当学科で環境経済学を専門領域としてきた富岡教授と高橋講師が 19 年度から環境計画学科に移動することになった。生物資源管理学科の学生定員に変化はなく、また生物資源の学生が両教員の科目選択をするのにも支障はありません。

教員の出入り

本年は但見教授と西尾助教授が定年退職された。3 月 3 日に両教員による最終講義が行われ、卒業生や現役学生、教職員で講義室は満室であった。当大学に 9 年勤務された但見教授は、農林水産省の研究機関から当大学に移動し、植物病理の教育・研究に携わられ、温かな性格で慕われていた。西尾助教授は短大時代から野菜の教育・研究に当たられ、県内を中心に教え子も多い。最終講義では滋賀の特産固有の赤カブについて話され、地域密着の県立大学ならではの研究をされていたことを初めて知る。

4 月から新たに鈴木教授と清水助手が着任された。鈴木先生は専門の微生物関係分野の教育・研究で新風を送り込んでくれると思われ、また吹奏楽の達人(吹奏学部の学生の弁)とのことで、課外活動を通じた学生指導も期待している。清水先生はまだ 30 代前半、分子生物学手法を駆使した先端的研究で学生諸君を引っ張ってくれることを期待したい。